

(別紙1)

## 論文の内容の要旨

論文題目 『主婦の友』にみる日本型恋愛結婚イデオロギーの固有性と変容

氏 名 大塚明子

### I. 序論

#### (1)問題設定：日本型恋愛結婚イデオロギーの固有性と変容

恋愛結婚イデオロギー、すなわち「愛・性・結婚」の三位一体の要請は、「男は外／女は内」という性別役割分業イデオロギーと並び、近代家族を支える両輪となってきた。第2次フェミニズム以降、後者には根底的な批判が加えられてきたが、「愛」を基盤とする結婚という理想はさらに強化されてきたように思われる。

1990年代以降、欧米の社会史や歴史社会学を導入した論者たちは、近代的な性別役割分業と家族員の情緒的結合を重視する「家庭」が大正期の新中間層で実現されたことに注目し、日本型近代家族の戦前と戦後における連続性を強調する。しかし、その夫婦の「愛」や性のあり方については、まだ十分に考察されていないのではないかと。

本稿は、(1) 当人同士の自由な意志決定と(2) 男女の相互的な愛着に基づき、(3) この2要件を満たす結婚のみが唯一正統的とされる、という3要件を満たす近代恋愛結婚イデオロギーを上位概念とし、欧米型のロマンティック・ラブ・イデオロギー、及びそのカウンターパートとしての日本型を下位類型と設定し、次の2つの問いに答えることを目指す。

1. 欧米のロマンティック・ラブ・イデオロギーと比較した場合、日本型近代恋愛結婚イデオロギーの固有性はどのようなものか？

2. それは時代とともにどのように変容してきたか？ 焦点の1つは、近年の性別役割分業に関する指摘と同様、戦前と戦後が根底的に連続するのか、それとも一定の断絶があるのかという点だ。

大衆雑誌『主婦の友』の言説分析を主な方法とするが、その際「愛」や結婚といった諸価値を常に他との関連で、かつ可能な限り全社会的な布置の中で考察し、またマクロな大枠としての抽象的・一般的価値／マイクロな行動に関わる具体的な規範という2水準を区別する。この分析枠組に沿って、2つの問いをより具体的な小問に分割する。

構成要素たる「愛・性・結婚」の3者の内的連関はどうなっているか。

→入口としての結婚方法（特に戦前の日本型近代家族は『不自由婚』の上に立っていたのか?）

これと関連して、未婚男女の出会いと交際を安定的に支える社会装置があるか。

→出口としての離婚（愛の喪失を理由とした離婚を正当化するか?）

→性と愛の結びつきは外形的・消極的か、それとも内在的・積極的か?

当該社会の文化的伝統がどのように継承されているか。

当該社会や時代の至上価値によりどのように規定されているか。

性別役割分業イデオロギーとの関連や比重はどうか。特に伴侶性と扶養者／主婦・母という役割が葛藤した場合、どちらが優先されるか。

「恋愛」「愛」という価値を行動化するためのマイクロで具体的な諸規範はどうなっているか。特に婚前／今後の愛情表現の作法がどのように与えられているか。また「男／女らしさ」というジェンダー規範とどう関連しているか。

## (2) 比較軸としての欧米のロマンティック・ラブ・イデオロギー

Luhmann(1986) と Lystra(1989) の議論を整理し、ロマンティック・ラブを「神秘的な牽引力」を起点とする「間人格的相互浸透」の過程として定義する。そこでは情熱 (passion) と友愛 (companionship) という2つの要素が、「真の自己」に触れてくる「ただ1人の人 (one and only)」という個別志向性において統合され、それが結婚との結合＝ロマンティック・ラブ・イデオロギーを可能にする。米国ではロマンティック・ラブの理念が両性に等しく内面化され、男性の扶養者 (provider) と伴侶 (companion) という2重役割では後者が優先された (Lystra)。

性の位置づけには一定の断絶がある。ヴィクトリア期の「愛・性・結婚」の三位一体は、性交渉の婚姻内への限定だけを意味していた。これに対し、20世紀型ロマンティック・ラブ・イデオロギーは、セックスを愛の最高の実現とし、両者を内在的・積極的に結びつける。

## (3) 『主婦の友』の言説分析の方法

1917 (大正6) 年創刊の『主婦の友』は、高度成長期に至るまで多大の影響力をもったメディアである。セグメント化された婦人雑誌は、送り手と受け手の距離が近く、価値や規範が相当程度共有されると想定される。また同誌の部数的な全盛期は、日本近代史上で読者の同質性をもっとも高い。だが、1970年代以降、日本の女性の生き方が多様化に向かう中、婦人四誌の発行部数は減少に転じる。そこで対象期間は、一定の社会的な代表性を期待しうる同年までとする。

資料としては、全目次から広い意味で近代恋愛結婚イデオロギーと関連するタイトル計 5492 本をリスト化したうえで、鍵的と判断した計 1602 本を対象とする (抽出率 29.2%)。分析には MAXqda を用いた。

## II・III. 戦前前期～1940年代：〈国家社会〉と精神主義的・普遍志向的な action としての「愛」

この時期の『主婦の友』は、男女は「異質だが平等」だとするリベラル派の良妻賢母主義に加えて、国家主義的イデオロギーを根幹とする。〈国家社会〉という至上価値は、戦時体制下には「皇国」として強化され、敗戦後も「民主日本」「世界平和」に置き換えて維持された。相即して近代恋愛結婚イデオロギーを構成する「愛・性・結婚」のうち、〈国家社会〉を支える「家庭」を最上位におき、離婚を原則否定する。夫婦の「愛」の理想は、妻が「高潔な人格」をもつ夫を「敬」し、互いに「理解」し、精神的な「同化」に至るものとして描かれた。

だが、誌面総体では理想主義的な「愛」と現実主義的な「和合」、換言すれば価値と規範の間に乖離がある。後者の記事群では、リベラルな建前と裏腹に夫優位性が全肯定され、「和合」とは夫が妻に満足することだった。性的充足は主に身体的な問題として捉えられ、「愛」の理念との結びつきは稀薄だった。ただし、過度の「享楽」を警戒する一方、やはり夫優位的な視点から「和合」の基盤として強調するという両義性がみられた。

欧米のロマンティック・ラブ・イデオロギーと比較した場合、同誌の固有性は互いに関連する3点に整理される。

1. 官能的で非合理的な passion を起点とするロマンティック・ラブに対し、精神主義的で意志的な action としての「愛」の理想。これと相即して、従来の「不自由婚」を批判しつつも、不安定な情熱たる「恋愛」には否定的で、家庭的グループ交際を最善と推奨した。夫の不貞にも、妻は自らの「人格」を向上させ「愛」を捧げ続けるべしと説く。「愛」の理念が〈国家社会〉という至上価値に整合するよう構築され、喪失自体があるはずないものとされた。

2. 欧米の伝統と対照的に、「ただ1人の人」という個別志向性の欠落。A. 理想主義的な記事群では普遍志向的な「高潔な人格」が掲げられ、B. 「和合の秘訣」ではどんな男女でも大抵「和合」できると説かれた。

3. 「間人格の相互浸透」としてのロマンティック・ラブと異なり、男性の扶養者役割が明確に優先され、夫婦間の親密なコミュニケーションという要請が組み込まれないこと。「同化」という理想や「親子の比喻」の根強さからも、以心伝心的な人間関係を理想とする文化的伝統が根底にあると考えられる。

日本型近代家族の定着期といえる昭和十年代から戦後期にかけては、「夫からの緩和」という枠内での平等化が進展するが、大きくみれば大正期からの連続性が強い。

## IV. 1950～60年代：「幸福」と官能的な passion としての性愛

1950（昭和25）年前後から、〈国家社会〉から「幸福」へという至上価値の転換が始まる。相即して「愛」が最上位に浮上し、その喪失を理由とした離婚が原則肯定される。波風のない結婚生

活においても内的な「愛」の存在／不在が問われ、「内面性の探索」が始まる。また理想（愛）と現実（和合）の二重性が後退し、夫婦の対等化は「妻からの要求」というべき新段階を迎えた。こうした中で前項 1. の固有性は失われていく。

1' . 官能的で非合理的な passion を起点とするロマンティック・ラブと似て、「愛」の理念は性愛の色彩を濃くしていく。「セックスの時代」が本格化し、積極的な「愛→性」説が主流化。20世紀型ロマンティック・ラブ・イデオロギーの浸透といえよう。

これに対し、他の 2 つの特質は基本的に引き継がれた。

2. 個別志向性の希薄さ。「恋愛」「愛」を深く考察した知識人も、それらをもっぱら性的・官能的な情熱としてのみ捉え、その究極的な虚しさを強調する。その底流には「色」や「無常」といった文化的伝統が伺われる。

3. 夫婦間の親密なコミュニケーションという要請の欠落。扶養者役割の優先は揺らがず、「恋愛」「愛」の理念と「男らしさ」のイメージとは、マクロな価値／ミクロな規範のいずれの水準でも十分に統合されなかった。

妻たちは「愛に生きる女」という新しいアイデンティティを追求し、「よろめき」の告白手記が氾濫する。だが、それは「女の哀しさ」という定型句に集約される根本的なジレンマに帰着せざるをえない。

1960年代末には、「愛に生きる女」でも主婦・妻・母役割でもない第3の方向性、個別的な〈私〉の「生きがい」が模索され始めた。しかし、男女共同参画型社会の方向性を打ち出した第3次主婦論争と違い、中断再就職の推奨という良妻賢母主義の枠内にとどまった。

## 終章. 今後の課題

本稿の方法に内在する限界として、男性の視線の稀薄さと、1970（昭和45）年までという時代的な限定がある。今後は他の資料で補足しつつ、日本型近代恋愛イデオロギーの固有性と変容という問いにさらに迫っていきたい。